

# 各職域における新型コロナウイルス感染症への対応 ～1年を振り返って～

勤労者支援部会より

## 大阪刑務所新型コロナウイルス感染症防止対策について

大阪刑務所 総務部用度課 法務技官栄養士 神野恭子氏

大阪刑務所は職員約500人が勤務し、被収容者約1,600人が収容されている大規模施設です。昨年4月、新型コロナウイルス感染症が流行したことにより、第1回緊急事態宣言が発令され、クラスターが発生しないように、職員全員一丸となってテレワークや時間差出勤などを行い、試行錯誤しながら業務を遂行しています。しかし、出勤せず成立する職種はほとんどなく、平日では毎日多数の職員が出勤するため、当然職員自らの水際対策が求められます。マスクや電車通勤者の手袋着用での出勤に加えて、入口での検温や消毒の徹底を促し、新型コロナウイルス感染症を持込まないよう施設全体で対策を行っています。

### 【職員の入門時の様子】

写真左側からL字型一方通行で手指消毒→消毒液噴霧→赤外線サーモグラフィカメラ→酸素濃度測定→手指消毒



一方、感染防止対策だけではなく、第1回緊急事態宣言下においても、経済産業・厚生労働省等からの要請を受けたアイソレーションガウンやマスクの製作をするために洋裁工場を稼働させ、受刑者の作業が医療従事者の後方支援となる社会貢献作業を実施しています。

### 【製作されたアイソレーションガウンとマスク】



大阪刑務所の食事を担う炊事工場では調理従事者が感染しないように最善の注意を払い、納品や食材を運搬する際に、台車のハンドルや器具など共有箇所は、次亜塩素酸ナトリウムによる消毒を念入りに行いました。また、給食関係者の感染などによる給食停止に備え、非常食も7日分(21食)常備しています。

### 【配食用器具などの消毒と非常食保管】



## 事業所給食施設における感染症対策について

シダックスコントラクトフードサービス株式会社 近畿支店 副支店長 奥田康代氏

現在、新型コロナウイルス感染症の第3波の終息の見通しが見えない状況の中、社員食堂を中心とした事業所給食施設においては、安心・安全な食事提供のために、感染予防対策が重要な取り組みとなっている。

昨年春の緊急事態宣言期間には、食堂が閉鎖となった企業もあったが、今回の1月14日から開始された緊急事態宣言下においては、在宅勤務の推奨をしながらも、食堂は閉鎖せず営業を継続している場合が多い。感染防止だけでなく、万が一感染が疑われた際に感染拡大を抑制するための対策もあり、一部ではあるがその事例を紹介する。

飛沫感染防止策として、飲食店でもみられるようなアクリル板の設置、対面式を禁止し教室方式での着席、座席数を減らして間隔をあける、会話禁止等の他に、濃厚接触者（疑いを含む）の把握のために、使用した座席ごとに利用者・着席時間帯を記録する事例もある。また、マスクの扱いに着目した事例として、マスクの正しい着用だけでなく、外し方への案内、外したマスクが感染拡大の原因とならないように、食堂入館時にトレーを取る場所にマスク保管用のビニール袋を設置している事例がある。そのビニール袋へ外したマスクを保管して食事をとり、終了時にマスクを着用したら、使用済のビニール袋は食堂退出時には廃棄する、という流れになっている。

この他にも様々な対策がされているが、施設内で体調不良者が発生した場合の施設側と委託給食会社との情報共有を継続しながら、会話を控えるように求められている状況でも、事業所給食施設が休養・休息やその後の活力を生む空間・ひとときとして、安心して利用者にご提供してもらえるような存在であるよう、今後も取り組んでいきたい。



## 新型コロナウイルス感染症非対応病院の感染症防止対策について

社会医療法人信愛会 暇生会脳神経外科病院 栄養課 井之上佐由利氏

### 1. はじめに

当院は、大阪府北河内地区の四條畷市に位置し、診療科 15 科、病床数 270 床（うち回復期リハビリテーション 42 床）の二次救急病院です。四條畷市には、公的医療機関や総合病院がないため、地域医療における中核病院としての役割を果たすよう取り組んでいます。

現時点で新型コロナウイルス感染症患者の入院治療は原則として行っていませんが、「誠実と信頼の医療」を理念として掲げ、適切な感染対策を行い、患者さんが安心・安全に医療を受けられるよう環境を整えています。

### 2. 新型コロナウイルス感染症への対応(病院として)

第一波の時から

院内に入る際、発熱等の問診および検温を実施。接触者外来の設置。電話診療による投薬処方の実施。出入口を一カ所に制限。来院者のマスク着用・アルコール消毒の徹底。アクリル板の設置や待合のレイアウト変更の実施。院内のクリーンアップの定期実施。新型コロナウイルス感染疑い対応病棟・病室のゾーニング実施。入院患者の面会の中止。リハビリ担当病棟の固定。外来・病棟患者の検査時間を分けて実施。職員の体調管理（検温記録、有症状者の出勤・待機等のマニュアル作成）。

第一波終了時に、面会中止の一部解除（人数・時間制限ありでの面会者の受け入れ）となるが、2020年7月ごろより再度、面会を中止。10月ごろにオンライン面会を開始し、現在に至っています。

### 3. 新型コロナウイルス感染症への対応(栄養部門として)

日頃から体調管理や手指衛生、器具・厨房内の清掃・消毒などチェック表を用い衛生管理を徹底しています。それに加え、2020年4月ごろ（第一波の時）から新たに導入した対策は以下の通りです。

#### 【栄養課・厨房内での感染対策】

新型コロナウイルス感染症疑い患者の食器は、PCR検査にて陰性が確定するまでディスポ食器で提供。また、残飯・ディスポ食器は病棟にて感染性廃棄物として廃棄。栄養指導室はドアを開放し換気。アクリル板の設置や指導後の机や椅子の消毒を実施。集団栄養食事指導の中止。管理栄養士臨地実習受け入れの中止（Web対応を検討）。外来栄養食事指導時、及び入院患者が食事などでマスクを外す際は、マスクと共にゴーグルの着用を徹底。開催される会議にはオンラインで参加。

#### 【職員食堂内での感染対策】

食堂内での会話厳禁。バイキング方式を中止し、使い捨て容器にて一人分ずつ盛り付けて食事を提供。席は対面にならない（一方方向を向く）また一定距離を保つようにテーブル・椅子の配置を変更。室内換気、椅子・テーブルなどの消毒を定期的実施。職員が集中しないように食堂開始時間を30分早め、また会議室も休憩室として開放。

以上のことを、2021年2月現在も継続しています。

### 4. まとめ

いまだ終息がみえない新型コロナウイルス感染症。現在も医療現場では患者さんの受け入れやPCR検査開始など日々体制が変化しています。

その都度、感染委員会を中心に話し合い、対策を模索しながら感染防止に努めていきたいと思っております。



## 新型コロナウイルス感染症対応病院の感染症防止対策について

大阪市立十三市民病院 栄養部 源氏博子氏

### 1. はじめに（病院の概要）

当院は大阪市淀川区にある 263 床（一般病床 224 床、結核病床 39 床）の急性期総合病院です。2020 年 3 月初旬に結核病棟を新型コロナウイルス感染症受け入れ病棟にするよう大阪市から要請があり、3 月下旬より患者の受け入れが始まりました。2020 年 4 月 14 日、大阪市長が十三市民病院をコロナ専門病院にすると表明され、外来診療および新規入院、予定手術は休止、一般入院患者は退院や転院調整をすすめ、5 月 1 日より専門病院になりました。現在 3 病棟を新型コロナウイルス感染症患者用病床として運用しており、一般診療（産科を除く）は 7 月下旬より再開しています。

### 2. 新型コロナウイルス感染への対応(病院として)

患者の受け入れにあたり、毎週末に対策会議を開催し、患者の受け入れの流れや入院経路、PPE（個人用防護具）の着脱方法を含めた職員の教育、職員・入院患者発症時の対応などマニュアルが整備・改定されました。当院には感染症専門医がいないため、大阪市立大学に感染症専門医の派遣を依頼し、院内のゾーニングを行いました。一般病棟ではゾーニングの工事を行い、患者の受け入れを開始しました。外来再開にあたり、正面玄関でのマスク着用の確認や検温、手指消毒、感染予防のための問診票の記入などを実施しています。

### 3. 新型コロナウイルス感染症への対応(栄養部として)

栄養部も対策会議に参加し、下膳時の食器の取り扱い、ディスポ食器の導入について検討しました。結核病棟での患者受け入れにあたり、当初はガイドライン<sup>1)</sup>に準じ従来通りの食器での配膳を継続することになり、患者食提供業務の委託業者へ新型コロナウイルス感染症の感染経路や必要な PPE（個人用防護具）について教育を行いました。また看護部との調整のうえ、病棟での配膳方法の変更（配膳車や下膳車はレッドゾーンに入れず、病棟スタッフがレッドゾーン用配膳車に載せかえる）を行いました。

このような対応を進めていましたが、「コロナ専門病院」の報道により、委託業者のスタッフの退職希望が相次ぎ、食器や配膳方法の変更について申し出がありました。委託業者と事務、栄養部と看護部で協議を重ねた結果、ディスポ食器へ変更することになりました。残飯やディスポ食器は病棟で廃棄してもらう事になり、栄養部では配膳車専用のトレイのみ洗浄していますが、病棟スタッフがアルコール除菌クロスで清拭したものを専用の回収ボックスに入れて回収しています。

コロナ専門病院になるまで病院の管理栄養士は、外来栄養食事指導や入院患者の栄養管理等、臨床栄養を中心に行っていたため、一般診療の休止により業務量が減少し、新型コロナウイルス感染症患者に対してもベッドサイドに行けないことで、管理栄養士としての業務のあり方について頭を悩ませました。スタッフのモチベーションの低下も感じていましたが、病院長から「全員で取り組もう」と説明があり、患者に何が出来るかを各部門で提案することになりました。このことは管理栄養士としての業務を見つめ直すことになり、モチベーションの低下を止めるきっかけになったと思います。

栄養部では「新型コロナウイルス感染症の治療と予防に関する栄養学的提言」<sup>2)</sup>を参考に食事に ONS(経口的栄養補助)を付加することを提案しました。感染予防の観点から患者に直接説明できないため ONS の目的や特徴について説明したカードを付けたり、食材や栄養に関するコメントを食札に印字することで摂取率の増加につながるよう工夫しています。また病棟での配茶業務軽減のため、ペットボトルのお茶を配膳しています。

現在、高齢入院患者の増加に伴い、低栄養、嚥下機能の低下、摂食不良、経腸栄養、褥瘡保有など NST の介入患者も増加しています。NST 回診については診療録や病棟スタッフから収集した情報を元にカンファレンスを行い、食事の工夫や静脈栄養のメニュー提案などの検討結果を返すようにしています。

栄養食事指導については外来休止中も電話再診で月に数件は実施していましたが、一般診療再開に伴い医療安全管理部の助言も受けて、栄養指導室は患者との間にビニールシートを吊り、出入口にサーキュレーターを配置し、指導中も換気を促進しています。また初回指導の場合は聞き取りに時間を要するため簡単な問診票を準備し、できるだけ患者の話す時間を短くするような工夫を行い、診察室で行う場合はフェイスシールドを着用しています。

職員の健康管理としては従来の衛生管理チェックに検温や新型コロナウイルス感染症関連の症状など項目を追加して毎朝体調を確認し、体調不良があれば休むことを徹底しており、マスクをはずす事になる食事時間は 1 人ずつ取るよう工夫をしています。

#### 4. まとめ

新型コロナウイルス感染症への対策は未知の感染症に対する不安や「コロナ専門病院」に勤務していることに対する誹謗中傷もあり、ガイドラインに示されている“安全”だけでなく“安心”して業務に従事できるよう配慮が必要でした。ディスポ食器の使用は必須ではなく、PPE（個人用防護具）を着用して患者に接している施設もあるかもしれませんが、不安を抱えた中で栄養部としての業務を継続していくためには必要な対応だと思っています。

入院患者には、高齢患者も多くより介護度が上がり、看護師の業務負担が増加しています。栄養部として現在の配膳方法を変更していくことも今後検討していかなければなりません。これからも十三市民病院の一員として新型コロナウイルス感染症の診療に携わっていきたいと思います。

- 1) 日本環境感染学会：「医療機関における新型コロナウイルス感染症への対応ガイド第2版改訂版 (ver 2.1)」
- 2) 一般社団法人日本臨床栄養代謝学会：「新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の治療と予防に関する栄養学的提言」

